見え、皆「金」の字を冠せしめたのに基きたるものであるらしく、その以外には之を金牌と認むべき何等の徴證も存しないのである。それで余はその地質が金でなければ、虎符にも金にて作つたものの外、別にかかる金屬を以て作られたものもあつたことを認むべきであると記したのであつたが、頃日王國維氏の「元銅虎符跋」を讀んで、果してこの牌が金牌ではなくして銅牌であることを知つた。王氏の跋は學術叢編卷第二十四に收められて居り、

上虞羅氏藏銅牌。一、上端文隱起、作虎首、首下有孔、以便繫佩、孔下蒙古字一行、兩面同、余謂此卽元史之虎符也、云々

と見える。こゝに謂ふ銅牌は羅氏の歷代符牌圖錄に載せた元國書牌を指したのであること言ふまでもない。

④ Yule, The Book of Ser Marco Polo, 3rd edition, I. 350, 352 note.

⑤ 尤も氏が圖版第十三を參照せよと記したのは、或は單に「通例の刻文」といふ語に關してのみ指示したものであるかも知れないけれども、果してその意なら圖版第五、卽ちユールの示したミヌシンスク地方から出た、八思巴字だけを刻する外、何等の模樣を有しない牌（こゝに口繪第一圖として引いたもの）をこそ擧ぐべきであるのに、特にかゝる模樣を刻した圖版第十三を示したのは、かゝる意でないこと疑無からう。

⑥ B. Laufer, Skizze der mongolischen Literatur. Keleti Szemle, 1907, pp. 195–196. Очерк монгольской литературы, 1928, стр. 31–32.

⑦ Yule, ibid. p. 353.

⑧ Владимирцов, Сравнительная грамматика монгольского письменного языка и халхаского наречия, стр. 35.

⑨ 滿鮮地理歷史研究報告第九所載、（また箭內亘、蒙古史研究所收）元朝牌符考、註22

⑩ 蒙古史研究八八四頁。

⑪ 箭內博士は中統三年四月としてこの文を引いたけれども、實はこれに續いた四月七日の條として引くべきである。引用の文字も便宜上博士の引いたところを增減した。